

漂流

余は兎場島に倒るることを
 業を營むの預計なりしに
 余の銀主は初め約束しし
 ざりしかば余は唯だ捕魚のみを志し
 漁具の到着を待ち居たりしも遂に送り來らざ
 れば己むを得ず本年四月の頃同行の漁夫を伴
 ひ例の炭積船に乗りて八重山に歸り銀主の人
 々に而會したるに種々の手筈未だ整はず心な
 らずも延引したりとの話を聞きて見ればまた
 無理ならぬ所もあり左れども利益は充分の見
 込みあるものを空しく棄て、顧みざるは實の
 山に入りなから手を空しくして歸るに同えく
 遺憾實に涯まりなきものから更に人々を相讒
 して一番の準備を爲す遂に六月四日午前十二
 時を以て鹿兒島の船頭二名と共に例の船に乗
 り込みて再び八重山を發し兎場島に向ひたり
 此の日天候は晴れ波り怒るべき雲とは見へ
 ざりしが風は稍々強く波も九常より劇しけ
 れば船頭も亦た最も航路に注意して其舵を操
 りしに漸く進行するに従ひ風力次第に加はり
 て日全く暮れ船何時の間にか流れ始めたり常
 の航行なれば翌曉は必ず兎場島に着すべき筈
 なるに東天既に明ぬれども島影得て望むへか
 ら予眼に入るものは唯大山の如き狂瀾怒濤の
 みなれば心細くも三人は互に相勵まし必死と
 なりて舵を操り帆を張るなきし勉めて目指す
 方位に向はんとし行けども進めども島を見ず
 午前十二時頃に至れば既に二十里許りも流れ
 たるならんと思はれたり翌日は終日山をも島
 をも見ざりしが六日に至り始めて西方に當り
 曉霧もまた島影を認めたり是れど臺灣なる
 へしとて船を其の方に向けんとするも強風之
 を逆りて遂に得て近くへからず次第に雲水花
 々の間に吹き流され内海に在りては夢にも見
 るべからざる種の大濤風に激まて駭屑の怒を
 加へ一葉の扁舟を掀翻して忽ち萬丈の山嶺に
 登せ忽ち千尋の谷底に陥らしめ其危険なるこ
 と實に言照の尽すへき所にあらずしも流石
 は物價れま船頭のことなれば此の間に處して
 毫も動搖の色なく泰然として絶へず帆を掛け
 浸水をくり居たるは中々に翻母まと思はれたり
 斯くて一ひは限に入りし四方の島影も何時
 どなく白波に消へ行き四日目に至りては最早
 寄るべき島なく指すべきの方向を知らざれ
 ば心を決して唯だ船の行くがまに任せたり
 實に心細さの限りなりき
 然るに此の困難の時に際して一の窮脆こう起
 り九疊井は此度の行、兎場島に永住の積りな
 りしかば米穀は七八俵を積み居たるも飲料水
 の貯へ少くも此の時は既に一滿飯を炊くの
 水なきに至りまことなり左ればとて生米をか
 みて飯を炊く難にもゆかざれば潮を汲みて之
 を炊きしも之を食ふときは熱燄して堪ゆへか
 と予飢渴を至りて其困難云ふへくもあらざ

りき解ゆまで五日目となるや流石に吹き荒ら
 したる強風俄然と衰へて死す船舫も臺の
 上に乗ずるが如く少しも進退することなく余
 等も大に之を苦み三人交々權を執りて必死と
 なりて之を潰くこと終日遂に島を見ず予等の
 船日も之れと同じかりしが八日目の午後
 三時少し風を生え且つ順風となりまれば
 船の帆を張りて進航せば必ず支那に着するなら
 んと思ひ定めしより一同稍々力を得白帆高く
 張りて航行せしに九日目は何の見る所もな
 りしが十日目に至りて始めて支那の温州府な
 る一孤島を望み三人相見て笑ふ(つゝ)

●漂流談（※その3）

余は児場島に留まること数月捕鳥と漁魚の二業を営むの予計なりしが何故か八重山に在る余の銀主は初め約束しありし漁具を送り来らざりしかば余は唯だ捕鳥のみを専業とし日夜漁具の到着を待ち居たりしも遂に送り来らざれば已むを得ず本年四月の頃同行の漁夫を伴ひ例の炭積船に乗りて八重山に帰り銀主の人々に面会したるに種々の手筈未だ整はず心ならずも延引したりとの話を聞きて見ればまた無理ならぬ所もあり左れども利益は充分の見込みあるものを空しく棄てて顧みざるは宝の山に入りなから手を空しくして帰るに同しく遺憾実に涯まりなきものから更に人々と相議して一番の準備を為し遂に六月四日午前十二時を以て鹿兒島の船頭二名と共に例の船に乗り込みて再び八重山を發し児場島に向ひたり此の日天気は晴れ渡り恐るべき雲とは見へざりしが風は稍々強く波また常よりも劇しければ船頭も亦た最も航路に注意して其舵を操りしに漸く進行するに従ひ風力次第に加はりて日全く暮れ船何時の間にか流れ始めたり常の航行なれば翌曉は必ず児場島に着すべき筈なるに東天既に明ぬれども鳥影得て望むへからず眼に入るものは唯た山の如き狂瀾怒濤のみなれば心細くも三人は互に相励まし必死となりて舵を操り帆を張るなどし勉めて目指す方位に向はんとし行けども進めども島を見ず午前十二時頃に至れば既に二十里許りも流れたるならんと思はれたり翌日は終日山をも島をも見ざりしが六日に至て始めて西方に当り髻髻として島あるを認めたり是れぞ台湾なるへしとて船を其の方に向けんとするも強風之を遮りて遂に得て近くへからず次第に雲水茫々の間に吹き流され内海に在りては夢にも見るべからざる程の大濤風に激して数層の怒を加へ一葉の扁舟を掀翻して忽ち万丈の山巔に登せ忽ち千尋の谷底に陥らしめ其危険なること実に言語の尽すへき所にあらざりしも流石は物慣れし船頭のことなれば此の間に處して毫も動揺の色なく泰然として絶へず帆を掛け浸水をくり居たるは中々に頼母しく思はれたり斯くて一ひは眼に入りし西方の島影も何時となく白波に消へ行き四日目に至りては最早寄るへきの島なく指すへきの方向を知らざれば心を決して唯だ船の行くがままに任せたり実に心細さの限りなりき

然るに此の困難の時に際して一の窮阨こそ起りたれば此度の行、児場島に永住の積りなりしかば米穀は七八俵を積み居たるも飲料水の貯へ少くして此の時は既に一滴飯を炊くの水なきに至りしことなり左ればとて生米をかみて飢を凌ぐ訳にもゆかざれば潮を汲みて之を炊きしも之を食ふときは熱発して堪ゆへからず飢渴交々至りて其困難云ふへくもあらざりき既にして五日目となるや流石に吹き荒らしたる強風俄然として全く死し船体恰も畳の上に座するが如く少しも進退することなし余等も大に之を苦み三人交々櫓を執りて必死となりて之を漕ぐこと終日遂に島を見ず六七の両日も之れに同しかりしが八日目の午後に至りて少しく風を生し且つ順風となりしかば此の風に乗して進航せば必ず支那に着するならんと思ひ定めしより一同稍々力を得白帆高く張りて航行せしに九日目は何の見る所もなかりしが十日目に至りて始めて支那の温州沖なる一孤島を望めり三人相見て笑ふ。(つづく)